

実体経済の動向

◇需要の持ち直し傾向から生産、出荷は回復基調

最近における生産、出荷の動向をみると月によって若干のふれはあるものの、緩慢ながら回復基調を持続している。これは、需要が徐々に持ち直してきたことを反映したものである。すなわち、まず財政需要は、公共事業関連支出を中心に引き続き高水準に推移している。このため、建設資材が着実な増勢を続けているほか、公共ないし公益事業関連業種の生産、出荷水準もひとところに比べかなり高くなっている。また、一時停滞していた輸出は年初来再び増勢を取り戻しており、これを映じて鉄鋼、肥料、合繊、精密機械、自動車(とくに二輪車)など輸出好調業種の生産、出荷も上向き基調を示している。このほか、消費需要もいくぶん上向きさみであり、このため製品在庫調整の進捗と相まって、消費関連業種でも弱電、合繊のように減産体制を緩和しつつある業種が増加している。一方、民間設備投資は横ばい状態を脱していないが、先行指標である機械受注は、ゆるやかに

生産・需給動向(鉱工業)

(季節変動調整済み、増減率は%)

	指数	40年				40年			41年						
		1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月				
生産	172.8	171.6	173.5	174.4	175.8	182.2	180.2	前期(月)比	0	-0.7	1.1	0.5	1.1	3.6	-1.1
								前年同期比	7.7	4.2	2.5	1.0	0.7	5.6	4.8
出荷	168.6	168.3	168.4	172.0	173.1	181.1	180.0	前期(月)比	1.2	-0.2	0	2.2	1.6	4.6	-0.6
								前年同期比	7.9	4.8	3.3	3.2	3.0	8.4	6.3
製品在庫	217.9	220.8	224.0	226.0	226.0	227.4	225.5	前期(月)比	1.2	1.3	1.4	0.9	0.2	0.6	-1.1
								前年同期比	18.3	15.0	12.3	4.9	4.9	3.7	3.0
								在庫率指数	128.5	130.2	131.2	130.6	130.6	125.6	125.0

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。前年同期(月)比は原指数による。

ながら持ち直し傾向を続けている。

2月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比-1.1%と4か月ぶりに減少した。特殊分類別にみると輸送機械、建設資材を除き軒並み減少となっており、とくに、ここ2か月間かなりの増加を続けた一般資本財の落込みが顕著である。こうした減少は、前月に指摘したように、生産調整により生産の季節性が弱められ、季節調整指数が必ずしも実情を反映していないという事情による面が大きいので、引き続き回復歩調にあることは変わりがないと思われる(3か月移動平均を行なうと、前月比、11月-0.2%のあと、12月+1.7%、1月+1.2%)。ただ需要の持ち直しテンポが緩慢であるために、生産が一本調子に回復しえないという情勢にあることも見のがすことはできないであろう。

当月の特色的な動きをみると、自動車、化学肥料、合繊、精密機械などは、輸出ないし消費需要の持ち直しにささえられて総じて増加しており、また、石油製品は生産調整枠の増額修正を映じて前月に引き続きわずかながら増産となった。これに対して、民間設備投資関連業種では、従来低水準に推移していた電動機器、繊維機械に反動増がみられたものの、そのほかは金属加工機、化学機械などを中心に大幅に減少した。この間、財政ない

特殊分類別生産動向

(季節変動調整済み、前期(月)比増減率%)

	指数	40年				40年			41年						
		1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月				
投資財		0	-2.1	-0.3	0.6	2.2	3.7	-2.6	前期(月)比						
資本財		-0.4	-2.3	0.3	0.7	2.8	5.0	-4.1	前年同期比						
同(輸送機械を除く)		-1.4	-5.1	1.8	-3.2	9.1	4.3	-8.4							
輸送機械		1.0	-1.7	1.3	3.5	-4.7	6.2	1.5							
建設資材		0.4	-1.7	1.4	-0.1	0.6	0.6	0.7							
消費財		-0.7	-2.9	2.0	2.3	1.2	4.1	-1.2							
耐久消費財		-2.8	-8.6	1.4	0.3	2.5	6.5	-1.8							
非耐久消費財		0.5	0.5	2.1	2.9	0.7	2.7	-1.0							
生産財		1.1	0.4	1.3	0.5	0.9	3.3	-0.5							

(注) 通産省調べ(35年=100)

し公益事業関連業種のうち、土木建設鉱山機械、発送配電機器、通信機械、鉄道車両などは反動減となったが、運搬機械、建材などは増加した。なお、鉄鋼、紙パルプなどの生産調整業種は前記季節調整の問題もあって減少した。

なお、3月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比+1.0%増となった。

2月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比-0.6%の微減となった。特殊分類別には資本財、輸送機械、建設資材が引き続き増加した反面、ここ2か月かなりの増加を示した一般資本財は反動減となった。また、消費財も耐久消費財が物品税の引下げ(4月実施)をまえにしたメーカーの出荷手控えから減少したため微減となった。なお、出荷の場合も生産同様季節調整上の問題があり、ちなみに、3か月移動平均によってならしてみると、11月+0.5%、12月+1.7%、1月+1.8%と、着実な回復歩調を持続している。

出荷について当月の特色的な動きをみると、生産とはほぼ同様の動きがみられる。すなわち、自動車、化学肥料、合繊、精密機械などは、輸出ないし消費の持ち直しにさきえられて総じて好調である反面、民間設備投資関連業種では、このところ低調が続けた電動機器、繊維機械に反動増がみられたほかは、金属加工機、化学機械などかなりの減少となった。また、ここ一両月増加がやや目立った公共・公益事業関連業種では、土木建設機械、発送配電機器、通信機械などが反動減の反面運搬機械、建材などが増加した。なお、鋼船、産業車両では当月かなりの出荷集みがみられた。

なお、3月の出荷(速報、季節変動調整済み)は、船舶の著減などから、前月比-0.6%減となった。

2月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は前月比-1.1%と久方ぶりに減少した。特殊分類別には、耐久消費財が前記のように物品税の引下げをまえにした、メーカーの出荷手控えが響いて増

加したほかは、各財とも減少した。とくに、出荷好調の輸送機械は、前月に続いて1割以上の著減となった。なお、業種別には、一般機械、電気機械、窯業などで引き続き在庫調整が進捗しているほか、繊維も二次製品、織物を中心に徐々に減少した。この反面、鉄鋼では依然微増が続き、石油製品も原油処理枠の増大、需要期明けなどの事情からかなりの増加となった。

次に、在庫率の動きをみると、前記の出荷、在庫事情を反映して125.0(前月比-0.5%)と3か月続けて低下した。特殊分類別には、一般資本財、耐久消費財が出荷減を主因にかなりの上昇となった反面、出荷好調の輸送機械は昨春の水準にまで大幅に低下した。

なお、3月の製品在庫(速報、季節変動調整済み)は、前月比+1.0%の増加となった。このため在庫率指数は127.1とかなりの上昇となった。

2月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、国産製品原材料が減少(-1.6%)した反面、輸入素原材料がかなり増加(+3.2%)したため、全体では+0.4%の微増となった。最近の動きを3か月移動平均値でみても、11月124.9、12月125.0、1月124.9、とほぼ横ばい状態を続けている。これに対して原材料消費(3か月移動平均値)は、10月の160.3から、11月161.7、12月161.8、1月164.2と徐々に増加傾向にあり、このため在庫率は漸落している。なお、2月の在庫変動の内訳をみると、輸入素原材料は前月海員ストによる船繰り難から入着の遅れていた原油、鉄鉱石、コークス原料炭などが増加した。一方、国産製品原材料では、機械メーカーの鋼材在庫が引き続き圧縮されているほか、織物メーカーの綿糸、毛糸、鉄鋼メーカーの銑鉄(高炉修理に伴う生産減の反映)なども減少した。

販売業者在庫(季節変動調整済み)は、12月大幅減少となったあと、1月は前月比+2.9%とかなり

増加した。これは①自動車在庫が月初の売行き鈍化が響いて増加したこと、②綿花のユーザーへの引渡しが遅れたこと、が主因であり、市況堅調の鋼材、石油製品の在庫は、順調な荷動きを反映して減少した。

次に、設備投資の動きを一般資本財出荷の面からみると、民間製造業向けの金属工作機械、化学機械などはかなりの減少となっており、また非製造業関係でも電力業向けの発送配電機器、建設会社への土木建設機械なども減少した。しかし、化学機械等ごく一部の機種が低下傾向を続けていることを別にすれば、他の機種種の減少は、12月ないし1月にかなり増加したことの反動による面も大きく、ならしてみれば大勢横ばい傾向となってきた。一方、先行指標である2月の機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)は前月比+1.2%とわずかながら増加しており、引き続き回復基調にある。2月の動きを業種別にみると、製造業は鉄鋼、機械、紙パルプなどでかなり増加したものの、食品、化学、窯業などの減少が響いて全体では減少となったが、非製造業(海運を除く)は電力、建設を中心に増加した。

需要関係の指標

	40年	9月	12年	40年	41年	2月
	6月	9月	12年	12月	1月	2月
素 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	110.0 (68.4)	114.1 (74.5)	113.9 (73.0)	113.9 (73.0)	109.8 (68.0)	111.8 (69.4)
う ち 輸 入 分 (在 庫 率)	115.6 (66.7)	119.2 (71.0)	121.3 (70.5)	121.3 (70.5)	109.5 (62.7)	113.0 (64.6)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	138.6 (81.9)	136.7 (83.5)	138.1 (81.1)	138.1 (81.1)	141.4 (81.0)	139.5 (82.0)
販 売 業 者 在 庫	190.5	193.4	190.3	190.3	195.8	—
	40年	7~9	10~12	40年	41年	
	4~6	月平均	月平均	12月	1月	2月
機 械 受 注 (海運を除く民需、 同季節調整済み)	551 (573)	632 (575)	602 (648)	668 (687)	509 (632)	593 (640)
資 本 財 出 荷 (輸送機械を除く)	173.0	172.7	173.1	181.0	186.3	170.6

(注) 在庫、出荷は通産省調べ、季節変動調整済み指数(35年=100)。機械受注は企画庁調べ127社分。

◇商品市況は総じて回復歩調

3月から4月前半にかけての商品市況をみる

と、鉄鋼が鋼板類を中心に一段高となったのをはじめ、セメント、紙は引き続き堅調に推移し、また化学、砂糖も底入れ気配を強めるなど、総じて地合いの改善が続いた。もっとも、こうしたなかで繊維は引き続き軟化し、また石油もここへきて弱含みさみとなった。

このように最近の商品市況は、メーカーの生産調整体制が維持されているなかで、官公需が年度末の追い込み工事の進捗もあって次第に本格化し、また民需の一部にも持ち直しのきざしが生じてきたため、大勢として引き続き回復歩調をたどっている。もっとも、これをやや細かにみると、一部に上げ一眼ないし軟化商状を示している商品も目につく。これは、市況の回復がもたらば供給面の抑制によってささえられていた状態から、徐々に需要の増加をささえとするものへと移行していく過程で、需要の回復テンポと、減産緩和のテンポとが商品によってややまちまちであることの反映とみることができよう。たとえば薄板、厚板などの鉄鋼鋼板類やセメントなどが引き続き堅調を呈しているのは、需要が官公需を中心にかなりのテンポで持ち直しているのに対して、供給面では生産抑制体制がおおむね堅持され、需給が引締まり状態にあるためである。一方、石油、棒鋼、線材2次製品などがここにきて弱含んでいる原因は、主として、生産調整の緩和(石油)や減産の不徹底(棒鋼、線材2次製品)などによって、供給量の増加が需要の回復テンポを上回っている点に求められよう。したがって、先行きの市況としても、大勢としては引き続き地合いの改善傾向が進むであろうが、こうした需要動向とメーカーの生産調整態度いかに商品によって多少あやを生ずる公算も少なくない。

商品別の動きをやや詳しくみると、まず鉄鋼では依然堅調な地合いが続き、とくに薄板、厚板などの鋼板類は官公需、輸出ならびに自動車、弱電

業界からの需要回復にささえられて一段高となり、昨年9月の高値を更新した。もっとも、棒鋼、亜鉛鉄板などの市況は前記供給面の事情に加え、民間建築投資活動の停滞などから伸び悩みぎみとなっている。繊維では、人絹糸はメーカーの市中浮動玉買上げなどから小反発したが、綿糸、スフ糸は需要期を控えているにもかかわらず動意に乏しく、決算月を控えた紡績筋の売りあせりもあってじり安商状を続け、また羊毛糸、織物類も総じて軟弱な地合いを改めなかった。もっとも、採算線をすでにかなり下回っているだけに、4月にはいつて織物類などに下げ渋りの動きがみられた。非鉄は、3月中は海外市況が総じて弱含みであったほか、期末を控えて全般に見送り気運が強く、各品目とも軟化した。もっとも主力の銅は、4月にはいつてザンビアの鉱山ストライキやチリの建値引上げなどの海外事情を伝えて急反騰し、再び波乱含み商状となった。

次に石油では、灯油が需要期明けにより引き続き軟化したほか、1～3月の原油増処理による需給の引きゆるみや、上期供給計画が余裕含みに決定されたことが響いて、揮発油に安値物が出回るなど、総じて弱含んだ。また化学のうち基礎薬品類では、需要業界における生産調整の緩和を映じた荷動きの活発化から地合いの改善をみるものが漸増、合成樹脂についても塩化ビニールなど一部に下げ止まる動きがみられた。さらに砂糖は、年初来の大幅操短の効果が浸透してきたほか、需要期入りに伴い受注も増加し、小幅ながら上伸した。なお、この間汎用モーターの市況は、食品、建設業界からの需要の漸増に加え、建値の再引上げを見越した販売店筋の手当て急ぎもあって、じり高となった。

3月の本行卸売物価は、前月比-0.3%と8かぶり反落した。これは、伸銅品、すず地金、故銅などの非鉄がかなり大幅に軟化したほか、食料

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	引締め前 37/11 ～38/11	引締め後 38/12 ～39/11	引締め解除後 39/12 ～41/3	40年7月 以降* 40/7～ 41/3	最 近 の 推 移							
					41年 1月	2月	3月	3月 上旬	中旬	下旬	4月 上旬	
総 平 均	+ 3.7	- 0.7	+ 3.4	+ 3.4	+ 1.2	+ 1.0	- 0.3	保 合	- 0.2	- 0.1	+ 0.3	
食 料	+ 9.2	- 4.0	+ 8.5	+ 4.5	+ 1.9	+ 0.3	- 0.5	- 0.4	- 0.2	+ 0.3	+ 0.2	
織 維	+ 11.1	- 6.7	+ 1.0	+ 2.5	- 0.3	+ 0.5	保 合	+ 0.3	保 合	- 0.6	+ 0.1	
鉄 鋼	+ 4.2	- 0.5	- 1.5	+ 1.4	+ 0.1	+ 0.6	+ 0.7	+ 0.3	保 合	+ 0.2	+ 0.2	
非 鉄	+ 1.1	+ 19.9	+ 28.7	+ 30.4	+ 11.4	+ 8.8	- 4.6	- 2.1	- 0.9	- 2.0	+ 3.2	
金 属	+ 0.2	+ 3.6	+ 0.2	- 0.3	保 合	+ 0.6	- 0.2	- 0.2	保 合	保 合	+ 0.1	
機 械	- 1.4	- 0.4	+ 0.7	+ 1.0	保 合	+ 0.6	+ 0.5	+ 0.2	+ 0.1	保 合	- 0.1	
石 油・石 炭	+ 0.8	- 0.8	+ 1.1	- 0.6	保 合	- 0.2	- 0.1	保 合	- 0.2	保 合	- 0.2	
木 材	+ 3.6	- 1.1	+ 5.6	+ 7.4	+ 1.5	+ 1.4	- 0.5	+ 0.5	- 1.3	- 0.2	+ 0.2	
窯 業	- 0.2	- 1.5	+ 1.7	+ 1.0	+ 0.4	+ 0.5	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.2	保 合	+ 0.6	
化 学	- 0.2	+ 2.3	- 1.6	- 1.3	+ 0.1	- 0.6	保 合	保 合	保 合	保 合	- 0.2	
紙・パ ル プ	+ 6.4	+ 2.7	- 2.6	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.5	+ 0.4	+ 0.1	保 合	+ 0.8	+ 0.6	
雑 品	同水準	+ 0.7	+ 2.9	+ 2.4	+ 0.6	+ 1.0	+ 0.3	保 合	+ 0.2	+ 0.5	+ 0.1	
工 業 製 品	+ 2.9	- 0.8	+ 1.9	+ 2.5	+ 0.5	+ 0.9	+ 0.1	保 合	保 合	- 0.1	+ 0.3	
非 工 業 製 品	+ 6.3	- 0.4	+ 9.0	+ 7.0	+ 3.1	+ 1.2	- 1.3	- 0.5	- 0.7	保 合	+ 0.4	
非鉄・食料を除く 総 平 均	+ 2.5	- 1.0	+ 0.8	+ 1.5	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.1	+ 0.2	- 0.1	保 合	保 合	

* 印は年中のボトム。

品(鶏卵、牛豚肉など)も反落したためであり、反面、鉄鋼、機械、紙パルプ等は続伸した(したがって非鉄と食料を除いた総合では+0.1%の上昇となる)。この結果、年度間平均では+1.4%の上昇となった(39年度-0.1%、もっとも非鉄、食料を除くと40年度は-0.2%)。なお4月上旬は、非鉄(銅、伸銅品)の反騰のほか、食料(砂糖、鶏卵)、鉄鋼(薄板、厚板)、紙パルプなどの続伸によって前旬比+0.3%の上昇となった。

3月の消費者物価(東京)は前月比+0.6%と続騰(季節商品を除いても+0.4%)した。国鉄運賃引上げのほか野菜(白菜、ねぎ、さといも、きゅうり)、果物(みかん、りんご)など食料品の上昇が主因であるが、理髪、パーマメント代や住居費も微騰したためである。この結果年度間上昇率は+6.8%と前年度(+4.7%)をかなり上回った。

3月の本行小売物価(東京)は前月比-0.2%と

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

	総合 (季節商品を除く)	対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月の 前年 同月比
		39年度 平均	40年度 平均	41年 1月	2月	3月	
消費者物価 (東京)	総合	+4.7	+6.8	+1.2	+1.2	+0.6	+5.0
	(季節商品を除く)	+4.6	+6.2	+0.5	+0.4	+0.4	+6.5
	食料	+4.8	+8.1	+2.4	+2.5	+0.2	+2.4
	家賃地代	+9.0	+8.5	+1.0	+0.1	+0.4	+11.0
	公共料金	+3.8	+6.7	保合	+0.7	+2.7	+10.4
	自由料金	+11.0	+9.0	+1.3	-0.9	+0.5	+9.0
	その他商品	+2.0	+3.1	-0.2	+0.1	-0.3	+3.6
	被服	+2.1	+3.8	保合	-0.1	-0.2	+4.3
	光熱	-0.1	+0.4	+0.2	保合	+0.1	+0.8
	住居雑費	+4.1	+4.4	+0.7	+0.1	+0.2	+5.9
本行小売物価	総平均	+2.6	+4.6	+0.3	保合	-0.2	+2.4
	(生鮮食品を除く)	+1.9	+4.4	-0.6	-0.2	+0.3	+3.9
	食料	+5.3	+6.3	+2.5	+0.5	-1.0	+1.5
繊維	-0.8	+3.9	-4.9	-1.6	+2.1	+3.4	
本行輸出入物価	輸出	+0.8	-0.7	-0.1	+0.3	+0.3	-0.1
	輸入	-0.8	-1.0	+1.2	+0.4	+0.1	+2.5
	交易条件	+1.5	+0.3	-1.4	-0.1	+0.2	-2.6

小幅ながら4ヵ月振りの反落となった(生鮮食品を除くと+0.3%の上昇)。これは、魚介、畜産食品など食料品の値下がりに加え、建材、家具・じゅう器、燃料(灯油)も軟化したためである。

3月の輸出物価は前月比+0.3%と続騰した。これは鉄鋼が米国向け引合いの活発化や国内市況の堅調から引き続きじり高となったほか、木材(合板)、食料(冷凍まぐろ、まぐろ、かつお缶詰)なども続伸したことによる。もっとも、繊維、窯業は小幅ながら軟化した。一方、輸入物価は前月比+0.1%と続騰した。食料、金属、化学はやや軟化した。繊維(原毛、原綿)、鉱物(銅鉱)、石油・石炭(石油、燃料油)などが上昇したためである。この結果、交易条件は小幅ながら久方振りに好転した。

◇経常収支は引き続き順調

3月の外国為替収支は、経常収支では70百万ドルの黒字を記録したが、資本収支が79百万ドルの赤字となったため(誤差脱漏9百万ドル)、月末外貨準備高は増減をみなかった。貿易収支は、輸出が季節的事情もあって著増をみたため、輸入もかなり増加したにもかかわらず、131百万ドルの大幅黒字を示した。もっとも、季節性を除いた実勢としては、輸出よりも輸入の増加の方が大きかったため、貿易収支の黒字幅は120百万ドル弱と、前2ヵ月(平均170百万ドルの黒字)に比べかなり縮小したことになる。当面、輸入の増勢は後記のとおり比較的なだらかなものとみられる一方、輸出は先行指標の動きなどからみて好調を維持するものと見込まれるので、貿易収支の実勢は当月程度の黒字を確保しうるものと予想される。貿易外収支は、期末月の関係上、利子配当、手数料などの支払がかさんだため、単関係受取が増加した(前年同月比+14百万ドル)にもかかわらず、61百万ドルの赤字を示した。

次に長期資本収支は、インパクト・ローンの返

済が受入れを引き続き上回ったほか、ガリオア・エロア債務の定期償還があり、一方、世界銀行に対する出資、日本輸出入銀行のアルゼンチン向け融資の実行などから対外投資も増高したため、76百万ドルの赤字を示した。また、短期資本も、為替銀行の外銀借入が増加したものの、輸出伸長に伴うユーザンスの増加が著しかったことから、

為 替 収 支

(単位・百万ドル)

	40年	10~	41年	41年		
	7~9月	12月	1~3月	1月	2月	3月
輸 出	735 (578)	757 (653)	687 (602)	566 (471)	671 (569)	823 (766)
輸 入	562 (507)	606 (560)	606 (551)	565 (548)	562 (474)	692 (632)
貿 易 収 支 尻	173 (71)	151 (94)	80 (51)	1 (△ 77)	109 (95)	131 (134)
貿 易 外 収 支 尻	△ 56 (△ 39)	△ 54 (△ 42)	△ 52 (△ 44)	△ 51 (△ 33)	△ 43 (△ 42)	△ 61 (△ 57)
経 常 収 支 尻	117 (32)	97 (51)	29 (7)	△ 50 (△ 110)	66 (53)	70 (77)
長 期 資 本 収 支 尻	△ 24 (28)	△ 23 (33)	△ 45 (5)	△ 43 (27)	△ 16 (26)	△ 76 (△ 39)
短 期 資 本 収 支 尻	△ 79 (△ 54)	△ 18 (△ 55)	13 (11)	51 (128)	△ 8 (△ 63)	△ 3 (△ 31)
資 本 収 支 尻	△ 103 (△ 26)	△ 41 (△ 22)	△ 31 (16)	8 (155)	△ 24 (△ 37)	△ 79 (△ 70)
誤 差 脱 漏	△ 8 (△ 5)	△ 10 (△ 16)	3 (△ 6)	17 (△ 17)	△ 15 (7)	9 (△ 7)
総 合 収 支 尻	6 (1)	46 (13)	17 (1)	△ 25 (△ 28)	27 (23)	0 (0)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

輸出入指標(季節調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	為 替			通 関		信用状		輸出	輸入
	輸出	輸入	貿易 尻	輸出	輸入	輸出	輸入	認証	承認
40年									
4~6月	688	571	117	712	687	586	299	757	619
7~9月	718	582	136	732	684	594	304	756	649
10~12月	699	608	91	693	693	598	311	710	661
41年									
1~3月	755	602	153	786	740	643	328	800	687
40年									
11月	690	612	78	712	714	600	308	704	754
12月	691	620	71	675	688	619	311	710	610
41年									
1月	757	577	180	838	701	624	315	784	633
2月	748	586	162	745	761	663	320	807	667
3月	760	643	117	775	758	642	351	810	760

(注) 季節調整はセンサス法による。各期月平均。

小幅(3百万ドル)ながら赤字となった。

なお、40年度中の外国為替収支についてみると、引き続き輸出の好調(前年度比+22%、前年度は+26%)と輸入の落ち着き(同+9%、前年度も+9%)から経常収支は811百万ドルの大幅黒字(前年度50百万ドルの黒字)となったが、資本収支がインパクト・ローンの返済、対外投資の増大、自由円預金の流出、為替銀行保有輸出手形の増加などにより681百万ドルの逆調(同157百万ドルの黒字)を示したので、総合収支の黒字は56百万ドル(同57百万ドルの黒字)にとどまった。

3月の輸出は、為替ベース、通関ベース(いずれも季節変動調整済み)とも前月に比べてそれぞれ2%および4%の増加となり、年初来の好調を持続した。為替ベースの輸出は前年同月比では+7%と伸び率が低いが、これは前年同月における為替銀行による輸出手形買取の期末集中が、例年より著しかったためで、実勢は通関額の増加率(13%)に近いとみられる。為替統計によって商品別の動向をみると、綿製品は依然不振、陶磁器、ミシンなども低調であるが、合織、化学品、自動車、電気通信機械などがこれまで同様順調な増加を示しているほか、このところ水産品が米国向けを中心に好調となっており、また最近停滞ぎみであった肥料も当月は中共向けの集中もあって急増をみた。

輸出は先行指標面でも好調な動きを示している。月々の不規則な動きをならすため季節変動調整済み計数を3ヵ月移動平均してみると、信用状は12月614百万ドル、1月635百万ドル、2月643百万ドル、輸出認証は同じく733百万ドル、767百万ドル、800百万ドルと、ともに順調に伸びている(信用状の前年同月比増加率は為替ベースの場合と同様の事情から6%と低い)。市場別ではアジア、アフリカ、豪州向けは低調を続けているが、米国向けが引き続き好調であり、昨今の

輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	40年	10~	41年	41年		
	7~9月	12月	1~3月	1月	2月	3月
食料	31 (+17)	25 (+6)	29 (+34)	20 (-13)	26 (+24)	39 (+101)
繊維製品	118 (+13)	121 (+6)	113 (+1)	105 (+2)	109 (+12)	124 (-7)
化学製品	44 (+49)	42 (+23)	50 (+17)	44 (+16)	57 (+71)	49 (-14)
金属製品	138 (+25)	131 (+13)	143 (+8)	126 (+11)	128 (+8)	176 (+8)
機械	148 (+28)	162 (+33)	169 (+28)	162 (+45)	165 (+36)	181 (+11)
その他	120 (+5)	126 (+6)	130 (+8)	115 (+10)	118 (+12)	158 (+4)
北米	236 (+25)	247 (+29)	278 (+30)	251 (+36)	256 (+33)	328 (+24)
アジア	171 (+14)	178 (+11)	170 (-2)	148 (-10)	178 (+23)	183 (-12)
欧州	76 (+36)	70 (+12)	81 (+12)	79 (+43)	69 (-0)	95 (+3)
その他	116 (+9)	113 (-1)	105 (+4)	93 (+5)	100 (+10)	122 (-1)
合計	598 (+20)	607 (+15)	634 (+13)	572 (+16)	603 (+21)	728 (+6)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%), 各期月平均。

輸出好調はもっぱら対米輸出の増加によってささえられた形となっている(本年1~3月の信用状の対前年同期増加に対する対米輸出の寄与率は81%)。したがって米国景気に大きな変動がない限り、輸出は引き続き順調に推移するものと思われる。

3月の輸入は為替ベースで前年同月を約10%上回った。前年同月の輸入が米国の港湾ストライキによる遅延の反動から高水準であったことを考慮すると当月の輸入はかなり高かったとみななければならない。季節変動を調整してみても前月に比べて10%の増加となっている。商品別の動きをみると、大豆、雑食料、木材、石油などが従来から増勢を続けているのに加え、繊維原料、一部の金属などがかなり増加している。こうした輸入の増加は、銅について1月から2月にかけて国内価格が急騰して海外価格との間にかかなりの値開きができ

たため思惑輸入が行なわれたというような事情による面もあるが、主として在庫補てんの動きを映じたものとみられる。輸入原材料在庫は、海員ストライキの影響などから昨年末来目立って減少し、本年1~2月の在庫率がかなり落ち込んでいた関係からその補てんの必要が生じたものと思われる。

輸入信用状、承認なども、前年同月に比べてそれぞれ+12%および+16%と増勢がやや強まった。生産活動が回復に向かっていることなどから考えると、輸入は今後も大勢として漸次水準を高めてゆくとみられるが、最近のやや急速な増勢は、目下のところでは上記のような在庫補てんの域を出ないものように思われる。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	40年	10~	41年	41年		
	7~9月	12月	1~3月	1月	2月	3月
食料	117 (+25)	134 (+11)	129 (+9)	116 (+47)	121 (+13)	150 (-12)
原材料	346 (+8)	382 (+11)	401 (+22)	352 (+14)	380 (+19)	471 (+32)
原綿	27 (-21)	40 (+1)	38 (-3)	35 (+2)	38 (-11)	42 (+3)
原毛	26 (-3)	37 (+28)	34 (+22)	30 (+29)	34 (+22)	38 (+17)
鉄鉱石	37 (+42)	29 (+15)	36 (+30)	26 (-1)	35 (+31)	47 (+58)
くず鉄	12 (-41)	7 (-53)	8 (-28)	6 (-53)	7 (-23)	10 (-1)
木材	39 (+17)	42 (+42)	40 (+36)	43 (+41)	39 (+27)	50 (+40)
石油	82 (+27)	91 (+14)	99 (+21)	95 (+26)	89 (+11)	112 (+27)
化学製品	37 (-4)	40 (-2)	40 (+14)	39 (-6)	40 (+47)	42 (+13)
機械	49 (-10)	52 (-13)	45 (-6)	47 (+2)	38 (-16)	51 (-5)
鉄鋼	10 (-31)	8 (-40)	8 (-27)	9 (-22)	8 (-16)	9 (-39)
その他	54 (+25)	47 (-1)	50 (+22)	42 (-5)	43 (+22)	65 (+50)
合計	613 (+9)	662 (+6)	674 (+16)	604 (+14)	630 (+16)	789 (+16)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率%。